形のない本をデザインする

2011年8月6日
イースト株式会社
高瀬　拓史（@lost_and_found）

本の体裁を決定する要因

オープン・リフロー型の出版物は
印刷された本と異なり、制作者が体裁の全てを
コントロールすることはできない

文字から出発する組版、文字が不定のリフロー本

日本語組版の版面設計

- 文字サイズを決める
- 行長を決める
- 1ページの行数を決める

リフロー型の電子出版物

- 文字サイズ→可変、フォントは環境に依存
- 行長→可変、環境依存
- 1ページの行数→環境依存

出発点となる足場がない＞＜

文字の問題

環境によって表示できる文字が異なる

特にAndroidは第三・第四水準は不十分

JIS X 0213:2004のサポートを期待

小形 克宏氏「電子書籍の（なかなか）明けない夜明け 第8回　電子書籍時代の外字問題を探る（3）」[1]に詳しい

環境によって表示できる書体が異なる

どうしても必要な書体は埋め込みで対応化

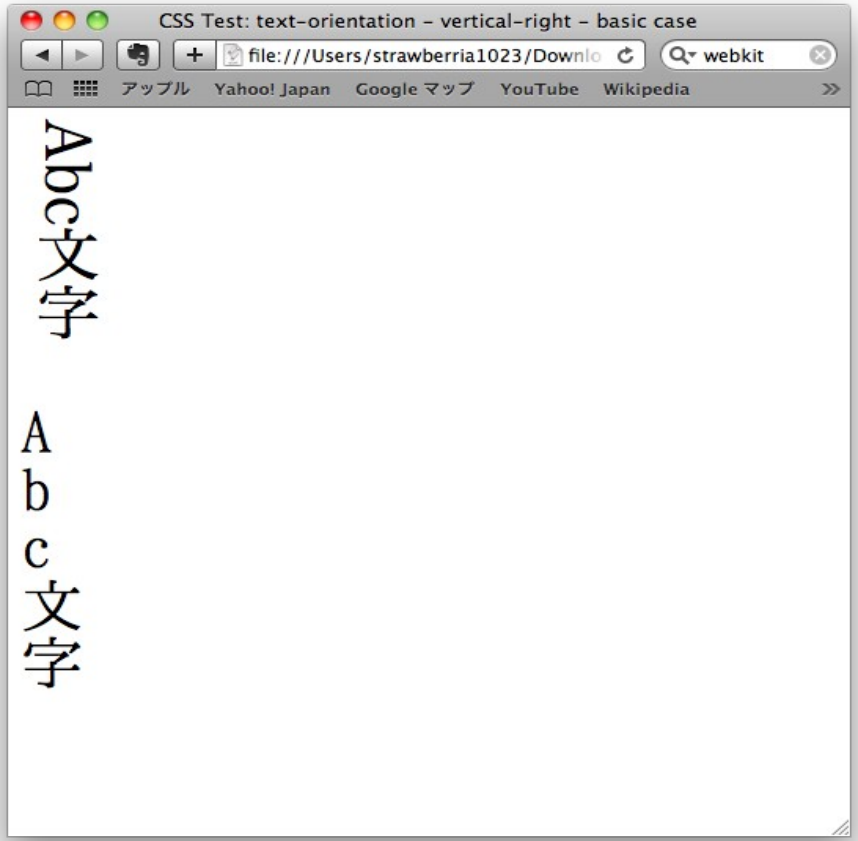
日本語も標準コアフォント（Arial, Georgia…etc.）が欲しい

フォントの持つ情報がバラバラ

縦書き時の文字の向きがフォントによって異なる

[1] http://internet.watch.impress.co.jp/docs/column/yoake/20110722_462158.html

フォントの持つ情報がバラバラ



ヒラギノ明朝とIPA明朝で同じテキストを表示させた例
　左：WebKit r79303
　右：WebKit r92173
IPA明朝は欧文の縦書き用グリフを持っていないため、ブラウザの挙動で補完する対応を追加した。

CSSの指定が面倒(´・ω・`)

本文サイズ = 9pt = 1em 行間8ptとした場合、
見出し12pt、手前1行空き、2行取り、行頭1字下げ（本文サイズ）を
エラスティックレイアウトで指定すると…

```
h2 {
    margin-top: 0.75em;
    margin-bottom: 0em;
    margin-left: 0.617em;
    margin-right: 2.034em;
    font-size: 1.333em;
    line-height: 1.6;
}
```

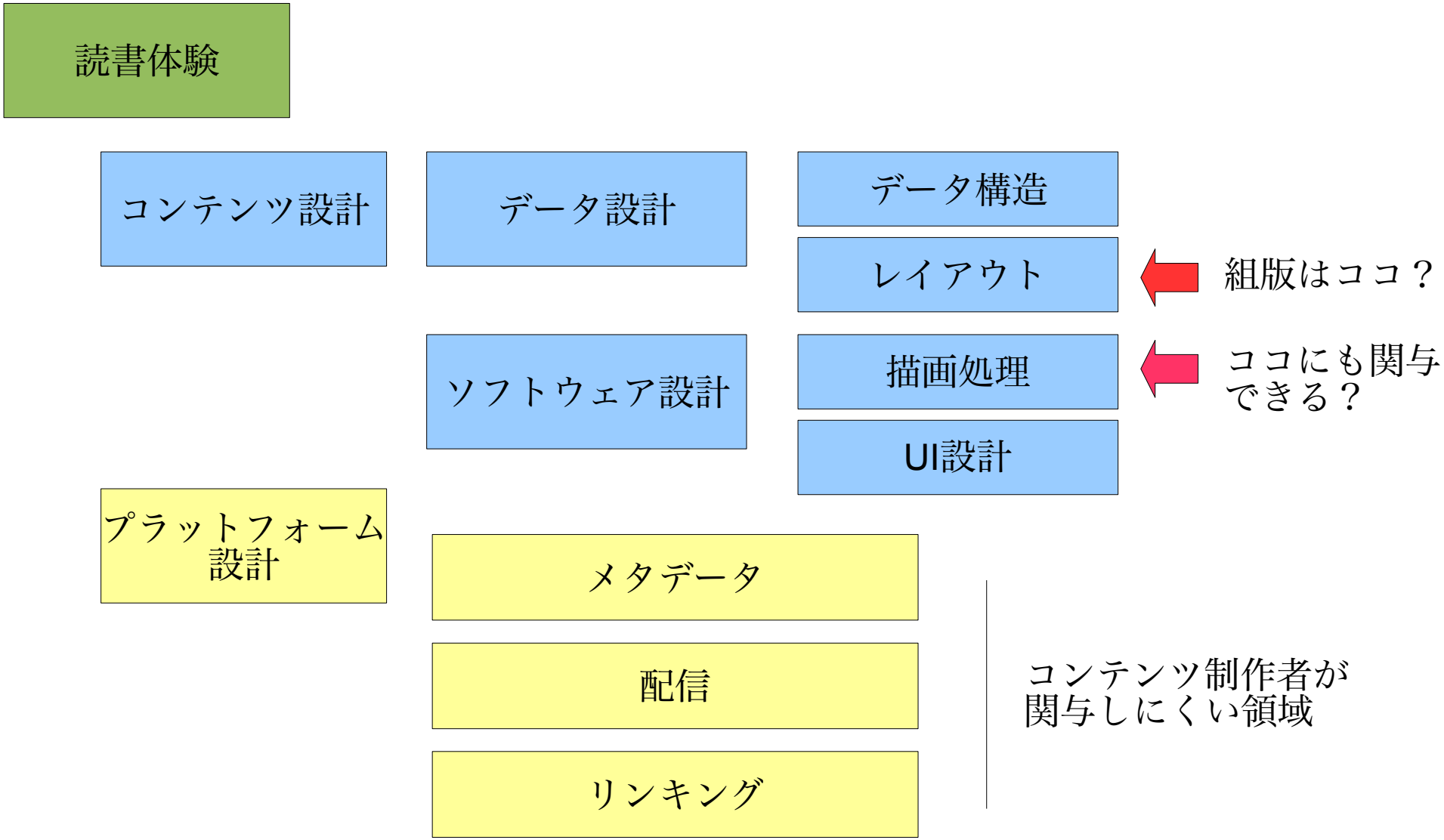
- 感覚的に指定しづらい（※小数点以下3桁以下は四捨五入した）
- 折り返すと行グリッドが乱れる
- 現状、本文サイズと行を基準としたレイアウトは断念したほうが効率的
- 本文サイズと行を基準とした指定を容易にして欲しい
  →CSS3 Values and UnitsとCSS Line Gridに期待

などいろいろ問題はありますが…

- 電子出版物の制作は紙の組版ルールにとらわれるべきではない　←多分合意できてる
- とはいえ、組版で培われた日本語レイアウトのノウハウは生かされるべき　←これも多分合意できてる
- でも結局、参考にできるものは紙のレイアウトしか今のところない←これが現状

そもそも組版の目的はなんだっけ？
読書体験全体にとっての組版の位置づけは？
組版のノウハウを生かせるのはどこ？

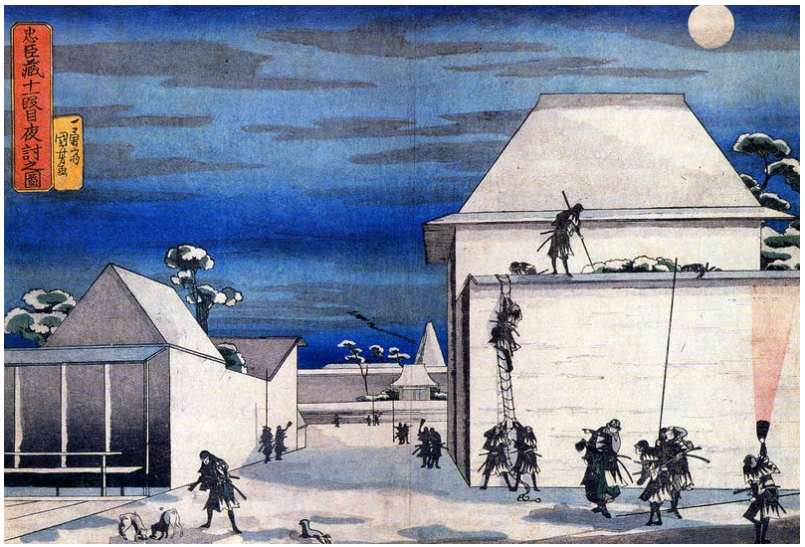
読書体験と組版の位置づけ



読書体験全体を設計する視野を

- 紙の出版物の制作フローで組版は下流工程
  →行処理、版面処理など関与できる分野が限られている
- 電子出版はカジュアルな出版を可能にする
  →誰もが上級工程からコンテンツの設計に関わることができる
- 「組版」というカテゴリーに縛られず、読書体験全体を設計する視野が必要ではないか？

厳格な構造・ゆるい構造



右：歌川国芳「無題（江ノ島）」
左上：ホッベマ「ミッデルハルニスの並木道」
左下：歌川国芳「忠臣蔵十一段目夜討之図」

組版ルールは工業的なもの

- 組版は体裁の良し悪しの議論になりがち
- 美的な側面の他に工業的な側面も意識するべき

日本工業規格の規格票
　JIS X4051 日本語文書の組版方法
　JIS X4052 日本語文書の組版指定交換形式

工業規格:工業分野における標準化を進めるため制定される取り決め

影響力を強める世界標準（Web/EPUB）で課題が顕在化

辺境の島国の宿命

わたしたちの詩歌の歴史は、いつかどこかでとてつもない思いちがえをしてしまったらしい。これは、たえず優位な文化から岸辺を洗われてきた辺境の島国という歴史的な宿命を負ってきたことを考えると、痛いほど身に沁みて感じられることである。わが国では、文化的な影響をうけるという意味は、取捨選択の問題ではなく、嵐に吹きまくられて正体を見失うということであった。そして、やっと後始末をして、掘立小屋でも建てると、まだ土台もしっかりしていないうちに、つぎの嵐に見舞われて、吹き払われるということであった。もちろん、その度ごとに飛躍的な高さに文化は引き上げられた。でも、その高さを狐につままれたように、実感の薄いままに踏襲しなければならなかった。

吉本隆明「初期歌謡論」